

What we have done English lesson under the situation of social distancing

著者	阿部 雄太, 荒納 郁美, 北野 真理恵, 真木 啓生
雑誌名	高校教育研究
号	72
ページ	33-43
発行年	2021-03
URL	http://doi.org/10.24517/00061867



What we have done

— English lesson under the situation of social distancing —

英語科 阿部 雄太, 荒納 郁美
北野真理恵, 真木 啓生

2020年、新型コロナウイルスが猛威を振るう中、本校英語科が、それぞれの学年に対し休業期間中に行った実践を報告する。なにを優先し、それに伴ってなにを取捨選択したのか、そしてそれがどういった現状につながっているのかをふり返る。そして、コロナ禍で浮き彫りになった英語という教科の特性を踏まえ、これからの英語教育についての展望を記す。

キーワード：オンライン授業 配信型 双方向型 科目「論理・表現」

1. はじめに

本校の学校編成や授業運営、学校設備に関して簡潔にまとめる。

本校は普通科3クラス学年120名の小規模校であり、英語科教員は4人である。常勤のALTはおらず、木曜日のみ非常勤ALTが2名勤務する（表現AをJETとのTTで展開）。科目1担任制であり、コミュニケーション英語は、基本的に、3年間持ち上がる。国語・英語・体育の3教科は文系・理系混合クラスで展開し、数学・理科・社会を選択授業形式で文理別展開している。

本校の特徴として、2019年度から校内のWi-Fi環境を完備しており、生徒は登校から下校まで、授業時間を含め、各自の通信端末を自由に使用することが許可されている。2020年度入学生より、一人一台の通信端末の購入をお願いしており、奇しくも新型コロナウイルス感染拡大の状況下で、これらの通信環境を活用できたことは不幸中の幸いであった。

本校が使用しているオンラインシステムは、主に次の3つである。

1. 金沢大学LMS (Learning Management System) :

オンラインテストや授業動画の配信、健康チェックなどに活用

2. slack :

学年ごとにワークスペースを設け、休業期間中における連絡事項など、簡易的なやりとりに活用

3. zoom :

教員23名に対し20名分のライセンスアカウントを発効し、生徒・保護者に対するオンライン面談や双方向型オンライン授業に活用

総じて、本校は通信環境において恵まれており、緊急事態宣言に迅速に対応できる環境にあった。ただし、どれも民間の無料サービス（ex. Microsoft Teams, Google classroom）で代替可能であるので、オンラインの取り組みそれ自体が「新型コロナウイルス対策の実践」として誇れるものではない。むしろ、「各家庭における通信環境の格差」など、本校も多くの公立学校と同じ問題を抱えながらの休業期間であった。これらの課題に対してどう対応したのか、以下詳述する。

カリキュラム構成（科目担当）と文責

		コミュニケーション英語		英語表現		
		英Ⅲ	S	L	W	
3年生	7単位	荒納	荒納	阿部	真木	
2年生	6単位	英Ⅱ		表現A	表現B	
		北野		荒納 北野 ALT	阿部	
1年生	5単位	英Ⅰ		表現A	表現B	
		真木		阿部 真木 ALT	阿部	

2. 3年生：7単位

(1) コミュニケーション英語Ⅲ：3単位

学校が休校となり、3年生の英語主担当として一番考えたことは、英語からいかに離れさせないか、ということであった。もともとカリキュラム的に、3年次は理科ならびに社会のウェイトが大きい学校なので、自学自習になれば数学や物理の勉強に時間を割いてしまい、余計英語を触らなくなる可能性が高かった。また、教科書を2学期中間考査までで終えたいと考えていたため、それをどうこなすかも課題であった。

そこで、以下のように対策をとった。

①金沢大学のLMSを利用したもの

(i) 週に1回ずつの文法ならびに単語テスト（必須課題）

英語に離れさせない手立ての一つとして期限を設けて文法ならびに単語テストを行った。テストは生徒に持たせている単語帳ならびに文法書のテストメーカーを使用し作成した。成績には点数ではなく、参加度を反映させる旨を先に伝え、一学期の成績に反映させた。

(ii) 速読教材（ミニテスト）（自由課題）

これもテストメーカーに付属しているものを使用してLMSにアップした。これは自由課題であった

ので、英語に特に力を入れている生徒が利用していたようであった。（平均20名程度利用（118人中）

(iii) 教科書のレッスンの教材（必須課題）

教科書をすすめる必要があったので、授業で扱う予定であった教科書の問題ならびにワークの一部をLMS上であげてノートにさせた。LMS上にあげる際には、教科書会社に著作権を確認した。ノート本体を提出させるとなると郵送費がかかってしまうため、携帯等で写真を撮らせ、Slackのダイレクトメッセージに期限内に添付させて提出させた。

② zoomを使用したもの

(i) 教科書レッスンの音読テスト

2年次が終わるまではSpeakingにかなり重きを置いた授業をしていたため、英語が出てこなくなることを危惧し、生徒には教科書の音読をするように伝えてはいたが、授業があった1・2年次でさえもしていなかった生徒がいる中で、休耕期間に入り、またコミュⅢの長い文章となり、どこまでの生徒が音読をしているか気になったため、zoomで音読テストを行った。スケジュールリングをSlackで提示し、時間になったらzoomに入ってきてもらい、音読テストを行った。

方法としては、ランダムで2つのパラグラフを読みあげるように指示し、その後教科書の内容に関する問題を英語で2～3問問う形をとった。

気を付けたこととしては、新出や授業があった際に必ず確認したであろう単語の発音のチェックである。また、英答英問を課したため、理解度チェックも行うことができた。

また、生徒の顔を直接見ることができて現在どういう状況なのかを知ることができたのは嬉しかった。

③ 学力考査の郵送

本校は定期考査とは別に独自に学力考査を課しており、4月にも一つあるはずであったが学校で行う

ことができなかつたため、学校まで問題を取りにきていただき、解答を郵送もしくは学校持参で届けてもらった。採点をし、解答は郵送で返却した。また解説はLMSにアップした。受験生のため、このような形ではあったが、学力考査を行えたことはよかった。

(2) スピーキング (コミュ英語) : 1 単位

Benesseのオンラインスピーキングを利用予定であったが、最初の設定等連絡が煩雑であったため、休校明けからに変更した。

(3) リスニング (コミュ英語) : 1 単位

特になし

(4) ライティング (英語表現Ⅱ) : 2 単位

難関大学進学を志望する本校受験生にとって、2ヶ月間の休業期間の発表は、学力の面で不安を募らせるものであった。そうした状況下で、英語表現では「オンライン添削 (配信型)」を行った。大学受験に向けた、単文の和文英訳問題の添削である。生徒から送られてきた英作文を担当教員が添削し、解説動画を金沢大学LMSにアップした (4レッスン52題)。結論として、この取り組みの成果は実際にはほとんどなく⁽¹⁾、しかし、今後の英語教育に対する示唆を与えてくれた。この点に関しては後述するとして、まずはオンライン添削の実践を詳述する。

英作文の提出にはGoogle Formsを活用した。理由は「アクセス性」を高めるためである。金沢大学LMSはセキュリティが担保されている分、ログインなどの手間があり、アクセス性が低くなるという問題点があった。Google Formsの「1クリックで回答できる (=アクセス性が高い)」という特性を生かすことで、休業期間中の受験生の参加度を高めようとした。提出の際には、評価のために氏名の記載だけを必須項目とし、英文は希望するものだけを

送信してもらった。家庭にWiFi環境のない生徒、情報端末を保持していない生徒も若干名いたため、英文の提出はすべて任意とした。その結果、結局のところ、どれだけアクセス性を高めても、約120名の生徒のうち、実際に回答したのは50名を超えなかった。私の授業設計の不備や、他教科との可処分時間の奪い合いなど、様々な要因が考えられるが、11月までの記述模試で、英語に苦戦した結果を踏まえれば、参加度を高める工夫が課題である。

解説動画は5分程度になることを目指して作成した。過年度生に対して反転授業を行っていた経験から、動画の長さが7分を超えると、途端に視聴率が下がることを知っていたためである。しかし、実際にはレッスン全体で30分を超えることもあったため、設問ごとに区切るなどして配信した。前述の理由から、解説の視聴も任意とした。実際の視聴者⁽²⁾は下記表の通りである。

金沢大学LMSの取り組み概況

	英文提出	解説動画 解説音声	模範解答 (PDF)
1 無生物主語	42	98	90
2 関係詞	29	58	84
3 接続詞	13	51	79
4 時制	18	71	79

n=118

解説動画そのものに対して、ネガティブな評価はなかった⁽³⁾。自分に必要な解説だけを選択でき、必要があれば何度も視聴できる再現性の高さがあったためであろう。クラス毎に進度や、微妙な解説の差が生まれることがなかった点も評価されたかもしれない。一題に対して解答が複数送られてきた場合は、比較しながら解説したのだが、アプローチの違いや、表現の幅の広がり意識させながら解説できた点も、今回の手法の強みだったかもしれない。

反省点は、解説が単調になってしまった点である。対面授業であれば、生徒の反応から、例文を補充し

たり簡素化したりと、解説に軽重づけを行える。しかし、配信型の添削では必要最低限の事項を伝達するに留まってしまった。3年生になって初めて英語表現を受け持ったので、彼らの英語力を正確に把握できていなかったこと、送られてきた英文に致命的な文法的誤りがみられなかったことも一因にある。対面授業であれば100分以上かけて解説する問題を、時間を短縮して解説するので、伝達される情報量の減衰も比例してしまった。動画である特性を生かし、適切な視聴覚素材をシームレスに挟み込むことで、内容の充実を図れたはずであったが、動画作成の頻度などを考慮して、結果的に簡素化・単調化してしまった。

さて、英作文の提出率と比べ、解説の視聴率は高いが、この状況こそが問題であることは、英語教育に携わる読者にはご理解いただけるだろう。彼らは、自分で英文を生み出す苦労を経ることなく、模範解答だけを見てわかった「つもり」になっている危ない状況であることに気づけていないのである。本校生徒全般の傾向として、「高い学力の割に英語に対するモチベーションが低い」ことが上げられるのだが、その根底にある要因のひとつが、上の表から推察される。つまり、受験対策のためにどれだけ演習を積ませてスキルを伸ばすことも、生徒にとっては「単語」と「構文・文法」の知識問題でしかなく、時間をかけて自分で作文するよりは、模範解答を覚えてしまう方が、楽で、確実な勉強方法だと、思わせてしまっている可能性が高いのである。特に、通常の対面授業であれば、一題に一人ずつ板書してもらい、教員がひとつずつ解説していくスタイルが一般的であるが、その際、どれだけの生徒が予習を徹底できているだろうか。複数の辞書を使用し、比較検討しながら、自分なりの完璧な英作文の追及を繰り返せば、その過程で幅広い表現が定着し、教員の解説を聞く意味が増す。しかし、そんな理想的な生徒は全体の何割だろうか。多くの受験科目を抱える

生徒に、英語に可処分時間を割くことをどれだけ強要できるだろうか。もちろん、板書の指名をランダムにする、予習できていない生徒に懲罰的課題を課す、など、授業規律を高めれば、授業開始段階での生徒の状態を一定に保つことは可能だろう。しかし、それは、誰かの解答を書き写すという作業を課しているに過ぎないことが容易に想像できる。自分の思考による試行錯誤を経ない英文がどれだけノートに書かれていても、その文字の羅列に意味はなく、生徒の可処分時間を単純作業に費やさせているだけに過ぎなくなる可能性の方が高い⁽⁴⁾。どれだけ解説しても改善されない文法的誤りが毎年繰り返されるのも、このことに起因していることが推測される。

以上を踏まえ、最後に今後の英語教育の展望を記す。2022年度から「論理・表現」が新導入される。この新科目に期待するのは、パラグラフライティングの重要性の焦点化である。これまでも高等学校での教育現場ではパラグラフライティングの重要性は認識され、指導が試みられてきた。しかし、前述のとおり、大学受験では知識しか問われないため、パラグラフライティングがスキルとして定着しづらくなっている。大学入試では文脈の必要のない単文の和文英訳問題や、パラグラフを構成するには足りない語数設定の自由英作文問題しか出題されないことが多い。結局のところ、細かな語法や構文の知識さえあれば、支離滅裂とまでは言わないまでも、論理性に乏しい英文であっても、及第点に至ってしまうのが大学入試の現状である。学校教育は大学入試にコミットすることが目的ではないが、昨今の大学入試改革や、高大接続の潮流を踏まえれば、その重要性をここで議論する必要はないだろう。

さて、「論理・表現」はパラグラフライティングに特化した科目でもないし、パラグラフライティングそのものに過度な期待を寄せることも間違っている点は重々承知している。しかし、科目名の変更に伴い、新しい到達度目標と、新しい指導方法が確立

していく中で、現在の「読み手意識が欠落し、文脈や場面設定のない、宙に浮いた言語知識偏重を余儀なくされる指導」から、「確実な技能指導」へと改革されていくことが期待される。本校では、3年間のカリキュラム作成が急務であるという共通認識をもって、開発に着手している。

3年生「表現Ⅱ」まとめ

実践： ・オンライン添削（配信型）

生徒の利点： ・必要な解説だけを視聴できる
・何度も視聴可能／高い再現性

教員の利点： ・全生徒に対し一律の解説
・複数回答を同時に扱える

課題： ・生徒参加
・必要に応じた解説

結論：「論理・表現」の導入に伴って、生徒が、文脈や場面設定から読み手を意識し、まとまりのある英文を構成するパラグラフィティングを、スキルとして習得できるようカリキュラム開発を行わなければ、日本人はいつまで経っても「わかってるつもりで使えない英語」から抜け出すことはできない。

3. 2年生：6単位

(1) コミュニケーション英語Ⅱ：4単位

私が休校中に意識したいと考えたのは、生徒同士を繋げること、生徒の学習習慣を継続させることの2つであった。しかし、オンラインを活用した学習支援という経験のない課題に大いに戸惑った。LMSでの小テストやYoutubeでの授業動画配信など、周囲でさまざまな方法が話題になる中、情報機器に疎い私の中には不安と焦りばかりが大きくなっていった。選択肢のどれもが未知で、持続可能性や効果を考慮して選びたいのに、判断材料がなく困った。教師が良かれと思うことが必ずしも生徒にとって有益とは限らないという点も心配だった。たくさ

んの「わからない」で頭がいっぱいになった私は、生徒のニーズを把握することから始めることにした。

生徒には「オンラインを活用した英語の学習支援について意見を聞かせてほしい」とslackで呼びかけ、zoomで話し合いの場を設けた。生徒からは主に「友達と一緒に勉強したい」、「音読やスピーキングをしたい」、「一方向の解説動画は要らない」、「質問対応をしてほしい」という意見が出た。最も大きな収穫は、生徒のニーズが一方向ではなく双方向にあると把握できたことであった。

生徒の声を踏まえ、以下のようなオンライン学習支援を行うことに決めた。

① LMS：

教科書の内容理解問題と文法問題（必須課題）、Star Wars ReadingのPower Pointスライドをアップ。取り組み状況を把握するための設問に加え、通常授業同様のワークシートのPDFファイルをアップし、生徒が各自印刷して使用できるようにした。

また、単語テストを必須課題として実施した。

② zoomミーティング：

休校中には、zoomを用いて双方向のオンライン授業を合計19回行った。音読とスピーキング活動、質問対応を中心とするもので、自由参加とした。また、全員を対象にStar Wars ReadingのPower Pointスライドを用いて教科書の音読テストを実施した。

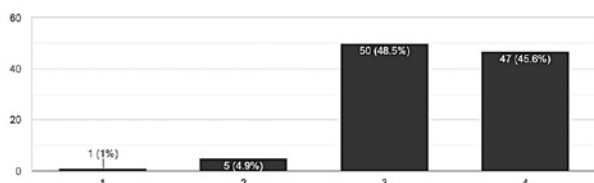
6月の分散登校時には、登校組の授業時間に合わせて在宅組ともオンライン授業を実施した。

LMSでの学習については、教員も生徒も不慣れた状態からのスタートだったが、数週間をかけてシステムに慣れ、活用できるようになったという印象であった。日時や実行回数に制限を設けることである程度のリズムを生むことはできたが、1つ1つの

課題が比較的短時間で取り組めるものだったこともあり、生徒の学習習慣に対する効果はさほど得られなかったように思う。

コロナ禍で実施した学習支援で最も手ごたえを感じたのはzoomを用いた双方向授業だった。休校中の授業の頻度は平均して2日に1回、参加人数は30名前後であった。学校での対面授業と全く同じようにとはいかないが、相手がいてこそ成立するコミュニケーションが生徒にとっては大きな意味をもっていたということが事後アンケートから見て取れる。

Q：zoom授業はあってよかったですか？



Q：zoom授業のメリットは何だと思いますか？

(複数回答可)

- ・スピーキングを存分にできること (63.1%)
- ・学習リズムを生むこと (58.3%)
- ・人と一緒に学べること (55.3%)
- ・リアルタイムで質問できること (30.1%)
- ・スピーキングの抵抗感が軽減されること (28.2%)

普段の授業では、学び合いやスピーキング活動を目的としたペア活動を頻繁に行っている。学校で受ける授業に近い、生徒が慣れている学習形態を取り入れるという点において、zoomのブレイクアウトセッションの機能を用いたペア活動は非常に有効であった。1対1のスピーキング活動が容易に実施できたのもこの機能あってのことである。

家庭の通信環境が安定しない生徒や、自分専用の端末を持たない生徒が一部おり、全生徒に対して一律の支援を行うところまでは至らなかったが、安定した通信環境のある生徒は積極的にオンラインを活

用することで継続的に学習に取り組むことができたようである。

「どうすればいいの」という漠然とした不安に駆られた休校期間、十分な学習支援をできたかと振り返れば反省点もある。EFL環境の日本において英語力を高めるためには継続的な学習が求められるが、全生徒が一定以上の質の学習を継続的に行うための支援には遠く及ばなかった。生徒のやる気に委ねる部分が大きかった。その結果、休校期間を境に標準偏差が増加した。担当学年は1年次より授業に対する取り組みが非常に良く、クラス全体で学ぶ雰囲気がある。休校期間に英語学習への取り組みが手薄になった生徒への働きかけと支援が課題として残った。

しかし、未曾有の災禍に、独りよがりなオンライン活用をしなかったことは功を奏したように思う。授業は生徒と一緒に作るものであるということを再認識するきっかけとなった。機器に疎い私の取り組みに辛抱強く付き合い、前向きに学習しようと取り組んだ協力的な生徒たちに心より感謝したい。

(2) 表現A (英語表現Ⅱ)：1単位

英語表現Aは、JET 2名とALT 2名の計4名で担当している。ALTは非常勤で、授業時間のみの勤務である。私たちにとっての課題は、ALTをどのようにオンラインで活用するかということであった。また、ALTがオンラインに慣れることも必要であった。全員を対象とする授業の開始は先延ばし、希望者対象のスピーキングレッスンからスタートすることに決めた。

①希望者対象：

希望者を対象にALTと1対1のオンラインスピーキングを実施。1人20分のレッスンに、のべ42名が参加した。

②全員対象：

全員を対象にALTとのオンラインスピーキングテストを実施。事前にトピックを4つ提示し、テスト当日にそのうち1つをALTが選ぶというものである。1人のテスト時間は約10分とした。

(3) 表現B（英語表現Ⅱ）：1単位

検定教科書（『Vision Quest English Expression II Ace』啓林館）の文法シラバスに従い、各自でドリル学習を進められるよう、オンライン上で指導を行った。具体的には①学習スケジュール表の提示

②教解答解説・補助プリント類の配布 ③オンライン小テストの実施である。いずれも金沢大学LMS上で行い、生徒のアクセス状況を把握できるようにした。併せて、真正性の高い題材への誘導として、英語コンテンツの紹介（映画・ドラマ等）を行った。

4. 1年生：5単位

今年度の新入生の特徴として、入学までに情報端末の購入を依頼していた。2019度より金沢大学LMSを本格的に導入し、金沢大学IDとWiFi環境を完備したためである。経済的な理由を考慮し、学校から生徒用PCを貸し出せる措置も用意しながら、あくまで購入は必須とせず依頼に留めたが、結果的に124名全員がなんらかの情報端末（スマホ・タブレット・PC）を所持しての入学となった。また、4月8日に入学式の挙行を決定し、同日、感染防止対策を徹底した上で、金沢大学IDの登録作業⁽⁵⁾を終えることができたため、休業期間中は比較的スムーズに生徒とコンタクトを取ることができた⁽⁶⁾。しかしながら、各家庭での通信環境にはばらつきがあり、休業期間中の対応を考える時に、非常に苦慮した。各家庭の通信環境の状況は下記の通りである。入学式当日実施。欠席4名。

家庭で使える情報端末を教えてください(複数回答)

スマートフォン	116
カメラ付PC	42
カメラ無PC	55
タブレット	66
その他	5

n=120

スマートフォン・PC・タブレットの通信契約状況を教えてください

大手3キャリア	92
その他	14
契約なし(WiFi)	2
わからない	12

n=120

家庭の通信環境を教えてください(複数回答)

無制限	自分の端末	93
	家族のカメラ付端末	6
	家族のカメラ無端末	4
無制限不可		4
わからない		16
その他		2

n=120

プリントアウトできる機器はありますか

ある	106
ない	13
(未回答)	1

n=120

DVDを再生・視聴する機器はありますか

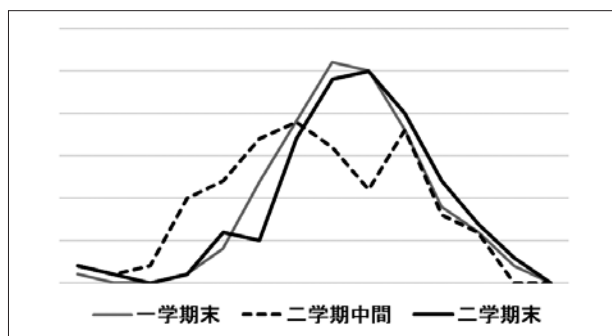
ある	114
ない	5
(未回答)	1

n=120

休業期間中の学習支援策として、PDFファイルやDVDを送付しての対応も検討していたが、調査結果から、どの手法を用いても、一律の対応をすることは不可能であることが浮き彫りとなった。日本語ですら、まだ一度も声を交わしていない教員・ク

ラスメートと、いきなりオールイングリッシュで授業を行うのか。そういった葛藤もある中で、新入生に対しては、まずオンラインで学年会やクラス会を開き、最終的には教科を問わない「オンライン勉強会」というかたちの対応に行きついた。受験を控えた3年生に対しては学力保障の充実、新入生に対しては高校生活の優先という教員の共通理解があったのであった。各教員が、受験生に対してはオンライン授業を拡充させる一方、新入生に対しては、教員の自己紹介動画や、現役大学生OB・OGからの激励動画など、高校生活に対するマインドセットを図るコンテンツを充実させていった。しかし、通信環境に差があるため、これらの多くが任意であり、取り組みにも差が開いた。特に、一学期末・二学期中間までの成績においては二極化の傾向がみられた。しかし、二学期末の時期になると、例年と比べても標準偏差の広がりや縮まり、学習への順応がみられた。

成績分布⁽⁷⁾



ただし、スマートフォンとの付き合い方など、生活面では課題を抱えている。

総じて、休業期間中の新入生に対する取り組みは、マインドセットと学習規律の両面において、対面授業を上回る効果を上げたものはなかった。むしろ、生活面ではスマホ依存に近い生徒が散見される状態であり、課題である。ただし、オンライン環境が早期に整備されたことで、学習面においては休業期間における遅れを軽減できたといえる⁽⁸⁾。

こうした新入生ならではの特殊な状況を踏まえ、英語科が教科としてどのように取り組んだかを以下詳述する。

(1) コミュニケーション英語 I : 3単位

休業期間中のオンライン授業は、すべて配信型で行った。理由は格差を生まないためである。前述の調査で、家庭の通信環境に差があり、双方向型には参加できない生徒が一定数いることがわかっていった。一斉授業が再開されるまでに偏差が大きくなれば、ペアワークなど、様々な場面で悪影響を及ぼしかねないことが容易に予想できたため、例年課題としていた、レキシコンとフォネティクスを休業期間中のメインテーマとした。

配信した動画は12本（マインドセットやフォネティクス、レキシコン、英語雑学など）。講義内容は下記の通りである。

オンライン講義概要

	講義内容
1 限目	音韻と 4 技能について
2 限目	コミュニケーションについて
3 限目	週末課題の取り組み方について
4 限目	音韻論概説
5 限目	音韻論 (oneの歴史的音韻変遷)
6 限目	音韻論 (twoの歴史的音韻変遷)
7 限目	音韻論 (threeの歴史的音韻変遷)
8 限目	接辞について
9 限目	過去形と完了形について
10限目	単語帳の使い方について
11限目	完了形と進行形について
12限目	発音記号について

あわせて、休業期間中を含め、3年間いつでも取り組めるように単語帳付属の小テストを126回分(14 stage (各3回分) × 初級・中級・上級)をPDFファイルで金沢大学LMSにアップロードした。また、週末課題用のディクテーション音声も6回分用意し

た。講義動画の視聴・単語テスト・週末課題の取り組みに関しては、前述の理由から、すべて任意とした。

講義動画視聴の概況

	実行者	視聴回数
1限目	116	118
2限目	103	95
3限目	103	114
4限目	90	125*
5限目	85	79
6限目	73	69
7限目	69	58
8限目	70	60
9限目	66	61
10限目	84	77
11限目	63	50
12限目	65	61

n=124

*過去にアップロードした動画であるため視聴回数は通算である

実行者（動画がアップロードされているサイトまでたどり着いた人数）と視聴回数（実際に動画を視聴した人数）に隔たりがある。通信環境が問題だったのか、講義内容から判断したのかは不明だが、LMSのアクセス性の問題もあったかもしれない。いずれにせよ、当初は93%を超えていた取り組み率が、最も低いときには半数を割ったことを考慮すれば、配信型のオンライン授業は、広くニーズを満たすものではないことがわかる。配信型オンライン授業で大切なのは、コンテンツを充実させ、生徒に選択権を与えることである。教員の可処分時間やマンパワーの総体を考慮すれば、自前で用意するより、アウトソーシングした方が良い場合もあるだろう。そうしなければ、教員は動画作成に四苦八苦し、生徒も嫌々視聴するという誰の得にもならない結果に陥ってしまう。実際に私の場合がそうだった。もし、動画の視聴を義務化していれば、さらに悲惨な結果になっていたことだろう。

以上、2020年度新入生に対する取り組みを総括した。結果的には「任意の取り組み」という「放置」に近い取り組みになってしまったきらいは否めない。それでも、前述の通り、今年度の新入生の英語力は数値的に例年と比べて見劣りしない。

新入生GTEC結果

	2020年度 8月		2019年度 4月	
	スコア	CEFRJ	スコア	CEFRJ
R	191.6	A2.2	190.3	A2.2
L	226.0	B1.1	224.1	B1.1
W	236.8	A2.2	252.7 ⁽⁹⁾	B1.1
S	-	-	-	-

新型コロナウイルスの影響があり、受験の時期は異なっているが、休業期間中の影響を考慮しても、一斉授業が開始してから、生徒たちはしっかりと英語学習に取り組んでいることが見受けられる。しかし、これらのことから「2ヶ月間程度の学習の遅れは影響が少ない」と結論付けるのは早計である。

新入生が、6月の一斉授業から学習習慣を形成し、対応するまでに至った過程には、各科目からの明確なメッセージがあったためだと感じている。英語科においては「コミュニケーション英語では単語」「英語表現では基本例文」の徹底的な反復練習を伝えてきた。Tanabu Model⁽¹⁰⁾を参考に、教科書予習ではなく、単語帳と向き合う時間を徹底させている。家庭学習でやるべきことを明確にし、授業では活動を軸にクラス全体が同じ言語活動に取り組めるよう授業設計することで、生徒のモチベーションやスキルの到達度に左右されないカリキュラム運営を心がけてきた結果が、今につながっているのではないだろうか。

新入生「コミュニケーション英語Ⅰ」まとめ

実践： ・オンライン講義（配信型）

生徒の利点： ・オンデマンド的に受講可能

教員の利点： ・ 普段扱えないテーマの講義

課題： ・ コンテンツの拡充

結論：一度も声を交わしたことがない新入生への対応は苦慮し、充分だったとは言い難い。しかし、一斉授業再開に向けた意識づけは一定の効果があり、結果につながったと推察できる。

(2) 表現A (英語表現 I) : 1 単位

ALTとの授業は双方向型になってしまうため、前述の理由から、新入生に対しては実施しなかった。この措置に関して、顕著な結果だと思われる影響は見受けられない。

(3) 表現B (英語表現 I) : 1 単位

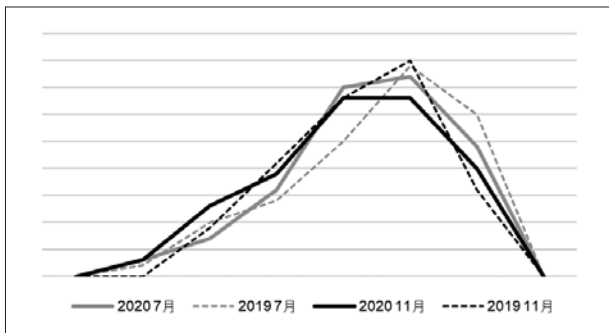
検定教科書(『Vision Quest English Expression I Advanced』啓林館)の文法シラバスに従い、各自でドリル学習を進められるよう、オンライン上で指導を行った。実施の方法は2年生と同様とした。

以上、科目ごとに担当者が実践を総括した。生徒のモチベーションを高めようとした取り組みによって標準偏差が大きく開いてしまった学年、動画配信から見えてきた生徒の実態など、必ずしもすべてが生徒のためになったとは言い難い。しかし、実践とその結果を真摯に受け止め、課題を見出し、発展的に解消していくことが教育研究の目指すところであるとすれば、本校の取り組みを含め、日本の教育現場は日々進歩し続けていることになる。本稿では、実践報告に留まっている項目が多いが、今後アフターコロナのニュースタンダードに向け、課題解決していきたい。願わくば、今回のような休業期間対策としてではなく、「論理・表現」におけるディスカッションやディベートといったアクティヴ活動に対する評価⁽¹¹⁾といった、ビヨンドコロナにおけるネオスタンダードとしたい。

注：

- 1) ここでの詳述は避けるが、進路実現を主眼においた取り組みであったにもかかわらず、11月までの模試の結果(英作文)は芳しくなかった。
- 2) 生徒が大学LMS上の動画を視聴する場合、該当ページにアクセスした時点で「実行者」としてカウントされる。一人が複数回視聴しても「実行者」は一人とカウントされ、逆に、視聴しなくてもアクセスのみすれば「実行者」としてカウントされる。本稿で挙げられている数値は、断りがない場合は「実行者」の数を指す。
- 3) 本校は毎学期「授業評価アンケート」を実施している。質問事項は固定されていたため、休業期間中の取り組みそのものに対するアンケートは行っていない。あくまで、ここでの印象は、私が生徒と普段話す中で受けた印象に過ぎないことを注記する。
- 4) 私は必ず学籍番号順に指名して板書してもらっている。指名された生徒の英語が間違っているかどうか重要なのではなく、板書された英文を足掛かりに表現の幅を広げることが目的のため。
- 5) 金沢大学IDを取得すると、自動的にEメールアドレスが付与される。slackの登録にはこのアドレスを用いてアカウント管理している。
- 6) 本校では、「公的な連絡は金沢大学LMSにPDFをアップロード」「簡易的な連絡はslack上で」など、用途に合わせてオンラインシステムを使い分けている。
- 7) 学期の成績と中間考査の点数では教科・科目数も異なっており、単純に比較することはできない。あくまで概況把握のための資料として了解いただきたい。

8) ベネッセ総合学力テスト過年度比較



9) 2019 年度入学者 GTEC スコア

	2019年度 4月		2020年度 8月	
	スコア	CEFRJ	スコア	CEFRJ
R	190.3	A2.2	224.9	B1.1
L	224.1	B1.1	253.1	B1.2
W	252.7	B1.1	240.2	B1.1
S	-	-	-	-

R と L のスコアが上昇しているのに対し、W のスコアは下降している。本当に技能が低下したのか、疑問が残る。ちなみに、2018 年度入学者の 2019 年（2 年次）4 月時点での GTEC の W スコアは 248.8 (B1.1) であった。

- 10) 金谷憲編著, 堤孝著 (2017) 『レッスンごとに教科書の扱いを変える TANABU Model とは—アウトプットの時間を生み出す高校英語授業—』アルク
- 11) 2020 年 11 月 21 日に本校が実施した第 2 回 WWL 研究大会・第 30 回 高校教育研究協議会において、パフォーマンステストを含む評価方法について議論された。複数人の発話を分けて文字起こしするようなテクノロジーも発達してきている。教育工学の発展待ち遠しい課題である。